

## 週日の説教

金 大烈 神父 2010年6月2日(水)

### 《正しいものは何か》

主の平和

今日の福音(マルコ 12・18-27)は疑問に思われる方がいると思います。先週と先々週の勉強会で聖書が作られた過程について、そのプロセスについて説明しましたが、今日の福音もその観点からみてみましょう。

さあ、人間的に考えてみましょう。兄がその妻を残して死んで、跡継ぎがない時、その弟が自分の妻として兄嫁と結婚することは、皆様の常識的な感覚でしやすい事でしょうか。現実的に考えてみて、兄嫁と一緒に住む事は自然なことでしょうか。そうじゃないと思いますよね。昔このような風習、習慣、文化を持っている国がいくつかありました。日本はどうだったかわかりませんが、大体が戦争とつながります。戦争があって男の人が亡くなります。それで跡継ぎを得るために、弟が兄嫁を自分の妻として受け入れる、そのような習慣が特にアジア系の国にありました。そういうことが自然になって、長い時間が経ちます。そして、人々の論争があり、どのように治めるか、抑えるか、そういう色々なことによって法律化されます。ですからその時代の人々が、一番色々な目的を考えたのでしょね。

昔は女性の権利はほとんど認められなかったのです。女性の人権が認められていなかった長い歴史の中で、結局女性の生き残る方法は、自分の夫を頼るしかなかったのです。自分の夫が守ってくれなかったら、生きられない時代でした。今の日本は、女性の人権があまりにも強すぎて、ちょっと男の人が崩れてしまう感じがするのですが、それは過去の女性が背負った苦しみの償いとして、男の人が受け入れるべきだと思います。(笑い) 長い歴史の中で女性が犠牲されました。どの国に行っても女性の口が強くなりました。今は離婚される心配があるのは女性ではなく男性です。(笑い) そのように時代が変わったのですが、私は長い歴史の中で、男性が行って来た色々な悪い事を、私達が償うことによって、いつかもっと良い雰囲気のある社会になると思っています。

さあ、その時代、自分の権利を守る事の出来ない女性は、やはり誰かに頼らなくてはなりません。その中で一番信用できるのは家族です。そのような雰囲気によって、兄嫁を自分の妻として受け入れた習慣が、ユダヤ人にあった訳です。それをもっと説得ある「これは神様の御旨だ」として、人々の心を抑えるためにモーゼの律法の中に入れた訳です。

このように、聖書が今の時代を生きる私達の目的に合ない時があります。その時は皆さんの感覚を信じて下さい。「これは何か訳があるのだ」と思って下さい。そして、それを調べてみたらその理由について説明が出来ると思います。

とにかく今の時代でも、昔の時代でも、これはやっぱりしやすい事ではなかったと思います。自分の血の絆である兄が亡くなって、その兄が愛した奥さんを自分の妻にするには、その妻になる立場で

も、夫になる立場でもしやす事ではなかったと思います。ただ、これはその当時の環境的な状況に、そして宗教的なことによってこのような事が出来た訳です。しかし、時代が変わって女性の人権が回復され、これはとんでもない事、あり得ない事とだと、皆が認める時代になって来ます。

今の時代に生きる私達は、こういうことがあったら人間として認められないし、理解出来ない事です。しかしイエス様は、何千年も人々が守ってきた社会の法律を無くすことはしなかったのです。そのまま人々が理解して、その中で本当のことを探してほしい、得てほしいというのがイエス様の教え方でした。

結局サドガイ派の人々は、復活を信じていなかったグループでしたね。ですからイエス様の言葉尻を捕らえようとしてこのような質問をしたことです。サドガイ派の人々の目的はイエス様を困らせることでした。しかし、イエス様は質問に対して簡単明瞭に「あなたが死んだら『めとることも嫁ぐ事もなく天使のようになるのだ。』私達が受け取る事はこれだけだ。」と答えました。そうしたら、私達はこのような質問が出来ます。「私達が死んだら、今愛するこの家族とのこの関係は全部崩れるのでしょうか」と。それは私が行ったことないので分かりません。(笑い)しかし、私の感覚では、「この愛する家族とは別れないように」神様が配慮して下さると信じます。私も自分の親父と会えると思います。このような心を持って信仰の生活をすればいいのではないのでしょうか。

二番目、私が先日の主日のミサで宿題をさしあげましたね。(これから幸せになる為に何をすべきかについて考えましょうといったテーマ)提出期限がありますが、皆様は私のことが好きだと思いますのでちゃんと提出して下さいと思っています。(笑い)私自身も考えてみました。「正しいさ」という言葉がありますよね。「正しさ」「これは正しい」とか。皆様、私達は誰でも正しく生きていすよね。そうじゃないのでしょうか。私は正しい生き方をしたいと思うのですが、皆様はどうもそうじゃないみたいですね。(笑い)

さあ、正しい生き方しようとしても、どちらが正しいか、たまにははっきり見えないこともあります。しかし、これが人生だと思います。正しい生き方しようとする人々は失敗も、ある程度避けられます。大事な事は、正しい生き方しようとする心があるかどうか、その心があれば少なくとも一回、二回自分を振り返ってみます。「私は本当に正しく生きているのか、これが正しいかどうか」と。このように考えない人々が結構いると思います。慣れてしまって、雰囲気慣れてしまって、全てが鈍くなって、本能的に目の前にあるものだけみようとするのが今の時代の雰囲気だと思います。ですから、いらないものについて行こうとするその人々の心の結末はなんのでしょうか。それは虚無感でしょう。いつも心が空っぽになってしまいます。

しかし、難しくても、色々な痛みを感じても「正しいものは何だろう」とそのような心の働きがあれば、やっぱり比較的失敗から遠ざかることが出来ると思います。皆様、私達は死ぬ時まで失敗します。それは人間の実存かも知れません。しかし、その中で神様がみようとするのは「この人はどのくらい頑張ったのか、私の教えに従おうとどのくらい頑張ったのか」そういう心を量って下さるので

はないかと思います。ですから失敗を怖がる必要はありません。それより「私は正しさを求めようとしているのか」これに怖さを感じて頂きたい。

さあ、三番目の話です。忘れる事を何と言いますか。「忘却」と言いますね。忘却の川がありました。ある女の人が自分の人生が余りにも辛くて、忘却の川にいてその川の水を飲んだら、全てのことが忘れられるだろうと思ってその忘却の川に近づきました。しかし、その忘却の川には天使が番人としていました。そして、水を飲もうとする者に必ず問かけます。「どうしてここに来たのでしょうか」と。「私の人生を振り返ってみたら余りにも辛くて、辛い記憶を消したいのです。」それを聞いた天使が答えます。「辛かった事も忘れられますが、喜んだ事も忘れてしまいます、それでもいいのですか。」「はい」「私は失敗した事で本当に辛いのでその失敗した事も忘りたいのです。罪意識から開放されたいのです。」と話します。するとその天使は「成功した事も忘れてしまいますよ。それでもいいのでしょうか。」「はい」それからその女の人「私はあまりにも憎まれたので、その憎まれた記憶を全部消したいのです。傷として今も痛くてたまらないのです。」と言いました。その天使は「そうするとあなたは愛されたことも全部忘れてしまいます。それでもいいのでしょうか。」と答えました。その天使の答えに彼女はよく考えました。そして何とか結論を出しました。「止めます」「止めます！」と。

これはどういうことでしょうか皆様。「辛かった事より」「失敗した事より」そして「憎まれた事より」数は少ないかもしれないけれどもやっぱり「喜んだ事」「喜ばれた事」、そして「成功した事」「誰かに愛された事」が、私達の生きる意味であることを示している話ではないでしょうか。

皆様、私達には色々な記憶があると思います。記憶は簡単に言いますと否定的な記憶と、肯定的な記憶があります。否定的な記憶はいわば傷です。傷が皆様の生活をもコントロールしています。しかし、私達は心のどこかに「私を愛してくれたその人」、私達が「今愛している人」、いわゆる「思い出」があれば私達はもっと相応しく生きがいを感じながら、生きる力を頂けるのではないのでしょうか。

ありがとうございました。